

NEXT HIROMIRA PROJECT



広島修道大学





ひろみら イノベーションスタジオ

地域がそれぞれの特徴を生かした自律的で持続的な社会を創生するために、大学が地域課題を学問的・実践的に紐解き、その解決の方途を、当事者意識を持つ多様な関係者が集まって議論をし、共に解決への行動を起こす場「ひろみらイノベーションスタジオ」を支援します。また、各スタジオが講演とワークショップからなるレクチャーを開催します。

学びから始まる 地域づくり —北広島町応援 プロジェクト—

活動期間 ▶▶▶2019.05.20 — 2020.01.31

- メンバー ▶ <ディレクター>
山川 肖美
(広島修道大学 人文学部 教授)
- ▶ <課題提供者>
池田 慶子
(北広島町役場 企画課・千代田地域づくりセンター)
- ▶ 砂田 寿紀
(北広島町役場 企画課)
- ▶ 田辺 康行
(北広島町役場 企画課)
- ▶ 加藤 浩司
(広島県立生涯学習センター)
- ▶ 松田 愛子
(広島県立生涯学習センター)
- ▶ 榊原 英史
(公財)広島市文化財団ひと・まちネットワーク部)
- ▶ 平尾 順平
(NPO 法人ひろしまジン大学)
- ▶ 三浦 浩之
(広島修道大学 国際コミュニティ学部 教授)
- ▶ 本田 弥生
(広島修道大学 人文科学研究科)
- ▶ 伊藤 昂
(広島修道大学 人文科学研究科)
- ▶ 山田 由美
(広島修道大学 人文科学研究科)

事業の概要・目的

2006年に改正された教育基本法第3条に「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」(下線は筆者による。)とあるように、少子高齢化を伴う人口減少を背景に、生涯学習は、その成果を社会に生かすこと、すなわち、生涯学習循環社会の構築が求められている。さらに、2008年の中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」では、「自立したコミュニティの形成の要請」や「持続可能な社会の構築の要請」に応じていくために生涯学習の必要性和重要性に論及されている。

こうした動向の中で、市町ベースで展開・支援されている生涯学習・社会教育行政は、従来の教育行政の範疇を越えて、一般行政に位置づくまちづくり部門や市民協働部門との連携・協働が必須の段階を経て、一般行政へ所管替えをする自治体も出始めている。しかし、これまで、「教育」の一環として生涯学習・社会教育を振興してきた現場職員・所管課においては再編後の自らの生涯学習・社会教育行政の振興のあり方に苦悩している現状がある。

北広島町においては、2019年度より「北広島町まちづくり拠点整備基本計画」を基に町内の4公民館を地域の拠点施設として「公民館」から「地域づくりセンター」へと名称を変更し、加えて、2021年度から全町レベルの拠点施設として「集い 学び合い 共にまちを創り 使い 楽しむ拠

点」を標榜する「まちづくりセンター」(仮称)が開所することになっている。生涯学習と地域づくりが共に推進できる体制かつ学びがまちづくりへつながる体制へと、各地域そして町全体で再編されつつあるのである。

こうして体制が整う一方で、これまでの公民館で、来館者の学習支援を中軸にひとづくりを推進してきた生涯学習・社会教育行政関係職員においては、「集い・学ぶ」ことに励んできた来館者の学びを地域づくり・まちづくりへどのように還元していけばよいのか、そもそも、学びから始まる地域づくりとはいかなることかイメージがしにくく、体制先行の現状に苦慮している実態がある。

そこで、本スタジオは、2021年4月からの北広島町「まちづくりセンター」開所までに、北広島町にとって目指すべき、学びから始まる地域づくりのあり方と具体的な方法を研究し、その成果を町全体に広く波及するために、組織化するものである。なお、本スタジオの成果は、北広島町にとどまらず、同様の悩みを抱える広島県内を始めたとする多くの市町村にとっても有用と考える。

(山川 肖美)

イノベーションレクチャー

NO.1 ▶ 2019.12.09. もっと楽しく学べるまちに～まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』～
講師 立石 孝裕 氏 (尼崎市総合政策局武庫地域振興センター所長)
山添 杏子 氏 (尼崎市総合政策局協働部生涯、学習!推進課)

NO.2 ▶ 2020.01.23. 地域豊饒化と風、水、土、種の話～種づくりの作法と色々な種のご紹介～
講師 永田 宏和 氏 (デザイン・クリエイティブセンター神戸副センター長)

| 1 趣旨

本スタジオは、2019年4月に「公民館」から「地域づくりセンター」へと改称した北広島町の大朝・芸北・千代田・豊平地域づくりの各センターと2021年4月より始動する北広島町まちづくりセンター（仮称）において、学びと地域づくりが好循環していくために期待される役割や仕組みを、同町職員や生涯学習・社会教育関係職員、専門家が、集い・学び・話し・深め・試す中で、描き・共有する、研究と実践のためのプラットフォームとして立ち上げたものである。

いま日本の生涯学習・社会教育の政策や行政、実践では、学びと地域づくりの関係性を再定義・再構築することが求められている。今回の成果が多くの生涯学習・社会教育施設・機関、生涯学習・社会教育行政にとって今後の行く末を考えるヒントとなることも企図している。

| 2 背景

グローバル化・ICT化の進展に伴う世界規模の社会変動や気候変動・自然災害の頻発を始めとする地球規模の環境変化に伴う社会課題に加えて、日本は、他国に先駆けて、少子高齢化に伴う人口減少社会の到来を迎え、より複雑な社会課題に満ちた局面を迎えている。

生涯学習・社会教育研究においても、ひとり一人が利他的に社会課題に向き合い持続可能な地域であり続けるために、どのような人材を発掘・輩出・育成したらよいか、そのためにどのような支援を行う必要があるか、問われ続けている。2006年の教育基本法の改正を経て、2008年の中央教育審議会での方向がより明確に打ち出され、以降10余年が経過する中でますますその傾向は強まっている。

2018年の中央教育審議会答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」では、「学びのオーガナイザー」という呼称とともに、今後の社会教育主事の役割として、「社会教育行政のみならず、地

域における多様な主体の地域課題解決の取組においても、コーディネート能力やファシリテート能力等を発揮し、取組全体をけん引する極めて重要な役割を担うことが期待される。」ことが明記された。

2020年度から再始動する新社会教育主事養成課程もこうした動向が反映された方向性にあり、ネットワーク型行政の中で、学習者を支援する力とあわせて、学習支援における戦略的・経営的な視点とスキルを持つことが求められる。果たして、ネットワーク行政の中で生涯学習・社会教育関係職員はどのような役割を果たせるのか、生涯学習・社会教育における学習支援の在り方とは、そして戦略とは、経営的視点とは何か、それぞれを関連付けながら考えていく必要があるであろう。

こうした政策・実践課題へ応えるために、2019年度から3年間の計画で、山川肖美、三浦浩之、坂口緑で共同研究を行う（科研費基礎研究（C）2019-2021）。一方で、喫緊の課題であることから、並行して、山川・三浦は、実践課題・行政課題に対して研究者として支援、すなわち、研究と社会貢献の結節するプロジェクトを発足することとした。今回のスタジオもその一環である。

| 3 メンバー

- ◎山川肖美（ディレクター・広島修道大学人文学部教授）
- ☆池田慶子（課題提供者・北広島町役場企画課課長補佐）
- 砂田寿紀（メンバー・同課長）
- 田辺康行（同地域づくり係係長）
- 加藤浩司（広島県立生涯学習センター所長）
- 松田愛子（同社会教育主事）
- 榎原英史（（公財）広島市文化財団ひと・まちネットワーク部管理課事業系職員）
- 平尾順平（NPO 法人ひろしまジン大学代表理事）
- 三浦浩之（広島修道大学国際コミュニティ学部教授）
- 本田弥生（広島修道大学人文科学研究科 M 2）

- 伊藤昂（同 M 1）
- 山田由美（同 M 1）

| 4 1年間の取り組み

(1) スタジオ（意見交換・研究会）の実施

第1回スタジオ

- 日時 2019年5月28日（火）18～20時30分
- 場所 本学ひろみらスタジオ
- 主な内容
 - ・自己紹介
 - ・協議案件
 - 1 今年度のゴールとゴールまでの工程（スケジュールや方法等）（提案者：池田）
 - 2 イノベーションレクチャーの人選の方向性
 - ・報告案件
 - 1 本スタジオ着手の経緯と背景（報告者：山川）
 - 2 広島版「学びから始まる地域づくりプロジェクト」の紹介（報告者：松田・山川）

第2回スタジオ

- 日時 2019年6月21日（金）18～20時30分
- 場所 本学ひろみらスタジオ
- 主な内容 第1回会議の振り返りシートをもとに、ゴールと工程の修正、イノベーションレクチャーの人選と開催時期等を協議。

第3回スタジオ

- 日時 2019年7月4日（金）17～19時
- 場所 本学ひろしま未来協創センター会議室
- 主な内容 北広島町教育委員会生涯学習課、地域づくりセンター、企画課の思いの異同の整理と助言

第4回スタジオ（予定：日時未定）

- 主な内容 ふり返りと総括、今後の展望の共有

スタジオに関連して、広島県立生涯学習センターや大竹

市玖波公民館等の主催講座や研修会に、スタジオメンバーは積極的に参加をし、情報収集や情報交換に努めた。山川は、これらの講座や研修等の講師等も担当した。

(2) レクチャーの実施（詳細はレクチャー報告に掲載）

第1回「もっと楽しく学べるまちに

- ～まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』～
- 日時 2019年12月9日（月）15：30～18：00
- 会場 まなびホール
- 講師 立石孝裕さん（尼崎市総合政策局武庫地域振興センター所長）山添杏子さん（同協働部生涯、学習！推進課）
- 参加 38名（行政関係者、事業者、本学教職員・学生）

第2回「地域豊饒化と風、水、土、種の話～種づくりの作法というんな種のご紹介～」

- 日時 2020年1月23日（木）14：00～16：15
- 会場 北広島町千代田地域づくりセンター2階研修室
- 講師 永田 宏和さん（デザイン・クリエイティブセンター神戸副センター長）
- 参加 45名（行政関係者、本学教員・学生）

レクチャーのフライヤー（作成 Miuka,Y.）



（山川 肖美）

(3) 北広島町での取り組み

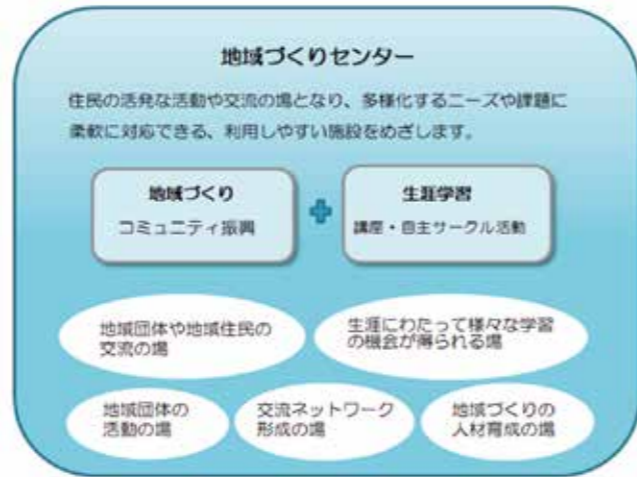
1) 北広島町の生涯学習とまちづくりの方向性とスタジオへの期待

①北広島町のまちづくりの方向性

北広島町では平成29年2月に策定した「第2次北広島町長期総合計画」において、目指すまちの将来像として「新たな感動・活力を作る北広島町 ～人のチカラがあふれるまち～」として掲げた。この計画に関連する背景として、「生涯学習の推進と、学びをまちづくりに活かす活動の推進」「コミュニティ施設の整備・充実と活用」を掲げ、「ひとづくり・まちづくり拠点整備事業」を具体的な事業として取り組むこととしている。千代田中央公民館の建て替えに伴い、平成30年1月に「北広島町まちづくり拠点整備計画」を策定し、本計画は生涯学習・交流の成果を住民と行政との協働（自ら果たすべき役割を自覚して、お互いを理解し、信頼するとともに、共通する目的に対して対等の立場で協力し合い、補完しあうこと）による地域づくり・まちづくり活動につなげる「北広島町まちづくり拠点施設」の整備計画の基本的な事項を明らかにすることを目的とした。

②公民館から地域づくりセンターへ

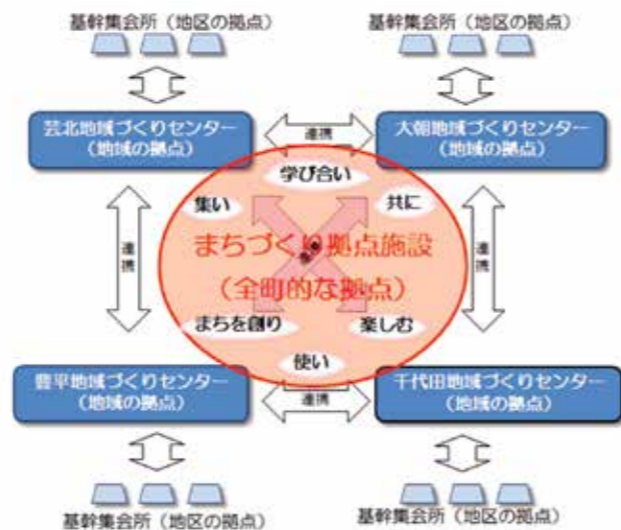
平成31年度から町内にある4つの公民館が「地域づくりセンター」と名称を変更し、生涯学習の拠点の機能を維持したうえで、「ひとづくり」「協働のまちづくり」の拠点としての機能も併せ持つ施設になった。従来の公民館活動や自主サークル活動など、主に自らの「学び」を中心に利用されてきた。しかしながら近年多様化する住民ニーズや地域課題に対応した地域づくりの役割も求められるようになり、来館者が集い・学ぶ場としての公民館から、学びから地域づくり・まちづくりの場へどう繋げていけばよいのか、生涯学習の観点を基軸に置き活動の仕方をどう変えていけばよいのか、という変化のきっかけになった。



(北広島町 HP より)

③まちづくりセンターの開設へ向けて

令和3年には「北広島町まちづくりセンター（仮称）」（集い 学びあい 共にまちを創り 使い 楽しむ拠点）が開所することになっている。学びの捉え方、将来の北広島町の創造へ学びをどう結びつけていくのか、あらたな展開の必要性が生じている。



(「北広島町まちづくり拠点整備計画」より)

④こうした動向を背景にしたスタジオへの期待

そのような中で、本年度広島修道大学のひろみらい

ノベーションスタジオに応募し、「学びから始まる地域づくり—北広島町応援プロジェクト—」がスタートした。

メンバーとの意見交流やレクチャーを受けることで、本町における学びから始まる地域づくりのあり方を検証し、北広島町のスタイルを考えていきたい。

2) 部局を超えた意見交換

①教育行政部局と一般行政部局がつながる

公民館が地域づくりセンターとなり、所属が生涯学習課から企画課へと変わった。しかしそこに勤務する職員の所属は分かれることになった。社会教育指導員は生涯学習課、地域づくりセンター長と事務職員は企画課の所属になり、一つの職場に所属の違う職員が配置される形になった。体制が変わったことで、職員は2つの課と繋がりを持つことになり、これまでとは違う視点で学びとまちづくりを考えることがはじまった。

②企画課と生涯学習課による意見交換

地域づくりセンターがスタートした時の生涯学習課と企画課での共通認識は社会教育法を基本に「まちづくり・人づくり」を考えていこうということであった。生涯学習関係の研修に企画課職員も積極的に参加し、意見交換をしていった。互いのこれまでの経験や考え方を知る機会、あらたな発見の場となるとともに、これからの考えていく基盤ができた。

3) 現場との意識共有

①北広島町独自の研修や現場との意識共有の取り組み

地域の「これから」を考える時に、職員の中で地域の歴史や地域の現状に対する認識に違いがあることがわかってきた。まずは地域の歴史や現状を知り、情報を共有することが大切ではないかと考え、「ネットワーク会議」（4つの地域づくりセンターと図書館・博物館（芸北高原の自然館）・生涯学習課の職員が定期的に行っている研修）の場を使って「地域学習」を行った。

《地域学習》

1 「38 豪雪と過疎」

- 実施日：令和元年10月4日 参加人数：16人
- 場 所：芸北文化ホール
- 講 師：金田道紀さん(千代田地域づくりセンター)
- 人口減少が進む現在、地域の近代史から今を考える機会となった。



(講師のプレゼン資料より)

2 「高原の自然館の取り組み」

- 実施日：令和元年12月13日 参加人数：12人
- 場 所：豊平地域づくりセンター
- 講師：河野弥生さん(NPO 法人西中国山地自然史研究会)
- NPOと行政が協力して事業を進める事例として参考になった。

NPO (民間)	協働	高原の自然館 (行政)
・芸北せどやま再生事業	・高原の自然館の運営	・高原の自然史発行
・会報誌「鳥尾」の発行	・自然観察会	・基盤整備 (コンセプト決定・条例・保護区設定)
・モニタリング	・ガイド育成	・標本の収集・管理
・標本の収集	・雲月山の山焼き	・学校の授業
・フィールドの整備	・千町原の草原保全	・プログラムづくり
	・霧ヶ谷湿原の保全	・組織の育成
	・カフェ形式での普及	
	・新フェス	
	・視察の受け入れ	

(講師のプレゼン資料より)

②広島県立生涯学習センターとの連携

職員の視点を変える研修を考える中で、国・県・町の現状を知り、目指す方向性に対する情報の共有が必要であると感じた。さらに各地域づくりセンターで実施している事業の視点の持ち方を見直す必要性を感じ、広島県立生涯学習センターが実施している地域課題研修支援（訪問型研修）を依頼し2回に分けて実施した。

≪地域課題対応研修支援（訪問型研修）≫

1 社会教育委員との合同研修

- テーマ 地域づくりセンターについて考えてみよう
 - 実施日 令和元年10月29日（火）参加人数：34人
 - 場所 北広島町図書館
 - 参加者 社会教育委員、地域づくりセンター職員、企画課職員、生涯学習課職員、支所職員、図書館職員
- 国・県・町が目指す方向性を知り、これからの地域づくりセンターについて社会教育委員と関係機関の職員が生涯学習と地域づくりについて情報共有することをねらって研修を行った。広島県生涯学習センター職員に国・県の動向について、企画課職員に北広島町まちづくり行動指針の説明をしてもらった後で、4つ地域と町全体を視野に入れたグループに分かれ「これからの地域づくりセンター」について意見交換をした。

2 地域づくりセンター職員研修

- テーマ まちづくりの視点を加えた事業の分析と立案
 - 実施日 令和2年2月7日（金）参加人数：12人
 - 場所 千代田地域づくりセンター
 - 参加者 地域づくりセンター職員、生涯学習課職員、図書館職員
- 本年度の事業を元に事業シートを作成することで事業の内容を明確化し、さらに作成した事業シートを使って視点を変えて事業内容を再構成し事業の見直しを行う研修を行った。

③イノベーションレクチャーの活用

- ≪みんなの尼崎大学≫
- 生涯、学習!を建学の精神とするみんなの尼崎大学に学びへの自由、楽しさ、学ぶ人のチャレンジを感じる。またキーワードでもある「みんなが生徒、みんなが先生、どこでも教室、一生ガクトク」は北広島町も目指したい学びの形である。市職員と地域コンサルが生み出した効果として、コンサルのフットワークの良さやネットワークの広さを使い、活動実施までの行動の速さを生んでいる。自治体だけではできない活動を知ることができた。また市役所の部署がバラバラに発信していた情報の一括化発信をして効率化した仕組みは、学びたい人々を吸引している。参考にしていきたい。
- ≪デザイン・クリエイティブセンター神戸≫

「地域の人たちが、お互い仲良く、生き生きと暮らす元気なまちになることを、私たちは「地域活性化」とは言わず、「地域豊穡化」と言います。」からレクチャーは始まった。私たちのまちがどうあってほしいのか模索している私たちに必要な言葉だった。ではどうやって豊穡化していくのか。「風の人」（その土地に種を運ぶ、刺激を与える存在）、「水の人」（その土地に寄り添い種に水をやり続ける存在。中間支援的存在。）、「土の人」（そこに居続ける存在。しっかり根を張り、活動し続け

る存在。）の中の「水の人」である私たち職員の在り方を考えていきたい。そして+クリエイティブの考え方はとても参考になった。私たちが事業を考えるとき、そのこと一つに集中してしまいがちである。「課題+クリエイティブ」の考え方で事業の見方・考え方・実施の仕方が変わる。「これまでの事業を根元から考え直してみ、既成概念にとらわれず、広い視野で、違う角度から、情熱をもって考えてみるのが大切である。」という考え方はすぐにでもできることである。

4) 北広島町としての成果と課題、今後の展望

プロジェクトが始まり、メンバーとの意見交換、先進団体のレクチャーで、学びとまちづくりの考え方ややり方について具体的に知ることができた。行政主導で主催事業を準備して実施していくやり方から、市民のやる気を引き出し、やりたいことを応援できるようにしていきたい。これには行政も市民との関係性を見直す時期に来ているのではないだろうか。行政がすべてを整えて事業を行うのではなく、共に事業を作っていくやり方を学ぶ必要がある。一人一人が考えて生きる人を育み、人間力がかさ上げされ、結果として地域づくりにつながる学びの循環の仕組みを作っていく。学びをプラットフォームにしたまちづくりをめざし、「自分ごと」「きたひろスタイル」をデザインしていきたい。（池田慶子）

5 スタジオとしての成果と課題、今後の展望

「生涯学習施策に関する調査研究」(2011年)によると、「社会教育主事」に期待する役割は、第1に「地域の社会教育計画立案」(37.9%)、第2に「学習計画・内容立案・編成」(22.7%)、「公民館主事」に期待する役割は、第1に「地域の学習課題やニーズ把握」(41.5%)、

第2に「学習計画・内容立案・編成」(17.1%)であった。すなわち、自ら計画を立案したり学習課題を把握したりし、自らそれらに応じた学習プログラムを開発することが生涯学習・社会教育職員に期待されてきた。

これに対して、本スタジオを通じて得た知見は、「主催事業を準備して実施していくやり方から、市民のやる気を引き出し、やりたいことを応援」すること、「行政がすべてを整えて事業を行うのではなく、共に事業を作っていくやり方を学ぶ必要」であった。そしてこうした考え方の転換により、北広島町は、「一人一人が考えて生きる人を育み、人間力がかさ上げされ、結果として地域づくりにつながる学びの循環の仕組みを作っていく」という希望を持つに至る。

そして今回のさらなる成果は、この知見と希望を共有する仲間を北広島町内外に広げたことであろう。

今後の展開をして北広島町に対して次のようなことが期待される。

- 1 具体的な取り組みとして、試行を重ねる
- 2 新生地域づくりセンターの新しい指針づくりをできる限り多くの人とともに考えて、つくってみる
- 3 きたひろスタイルのキーワード・キーコンセプトを見つける
- 4 風の人となる応援団、水の人を応援する人を増やす
- 5 1～4に関して実施したことを町内・町外に向けて広報発信する

本スタジオによる「学びと地域づくりの好循環」を促す仕組みの研究と実践に関してはまだ緒についたばかりである。今後、上述した考え方にもとづき、試行と検証を重ねる中で広くスケールアウトできる実践の理論を確立したいと考えている。（山川 肖美）

付記 なお、本報告及びスタジオの企画は、JSPS 科研費 19K04289 の助成を受けたものである。

研修の様子



もっと楽しく学べるまちに
～まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』～

日時：2019年12月9日 15:30～18:00
会場：広島修道大学まなびホール（協創館1階）
参加人数：38名

日時：2019年12月9日 15:30～18:00

会場：本学まなびホール（協創館1階）

タイトル：

「もっと楽しく学べるまちに
～まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』～」

講師：

立石孝裕さん(尼崎市総合政策局武庫地域振興センター所長)
山添杏子さん(尼崎市総合政策局協働部生涯、学習推進課)



参加者 38名（北広島町行政職員、同地域づくりセンター職員、広島県内行政職員、同公民館等職員、民間事業者、広島修道大学教職員、同学生、スタジオメンバー等）



はじめに——尼崎ってどんなところ？

平成25年度総合計画キャッチフレーズ

ひと咲き まち咲き あまがさき

兵庫県尼崎市は県内において最も人口密度の高い自治体

である。全国的に人口減少および少子高齢化がすすむなか、「住みたいまち」として人気をあつめている。学びとまちづくりが有機的に結びついているモデルとして尼崎の取り組みは注目すべきものがある。また、震災の記憶もつよく刻されており、そこから得た教訓は学びとまちづくりの在り方に色濃く影響をあたえている。

みんなのサマーセミナーとは？

夏休みに市内の高校を会場として、「誰でもセンセイ、誰でも生徒」をルールに学びのフェスがおこなわれる。この「サマーセミ」の愛称で親しまれるイベントは地域の人々が好きなこと、得意なことを「センセイ」として教え、また、他人の好きなこと、得意なことを「生徒」として学ぶ。5回目の開催である2019年度は2日間で約340講座、のべ約6300人が生徒となった。この盛況なイベントに個人の学びと多様な人々のつながりを見出すことができる。



<https://samasemi.jimdofree.com/>

みんなのサマーセミナーは、みんなの尼崎大学に先駆けて2015年にスタート。サマーセミがあったからこそ、尼崎の生涯学習の土壌は年々豊かになり、「みんなの尼崎大学」が生まれる風土や空気感、それを引き出し整える人が一定程度先

に育っていたと推察できる。

みんなの尼崎大学

「みんなの尼崎大学」はまちじゅうをキャンパスに見立てて、尼崎を楽しく学べるまちにするためのプロジェクトである。

(1) 発足の経緯

尼崎は水害や公害、戦災、震災などの困難な問題をまちの人たちの学びの力によって乗り越えてきた歴史がある。昭和40年代には、市民の勉強会から公害反対運動に発展した歴史的事実があり、まちを変えるきっかけとしての市民の「学び」が息づいている。

また、公民館などの公共施設および市役所主催でおこなわれている講座について、2014年度調査によると、約500の講座が提供されていた。さらに、そのほとんどが無料であった。これは、「最初の一人の学びが周りの人へ伝わり広がることで、まち全体の学びになるはず」という理念からであったが、企画や運営の主体はさまざまであり、まち全体の学びという点で不十分であった。そこで、それらの情報を一元化して整理し、より学びやすい仕組みをつくるための機能が「みんなの尼崎大学」にもとめられることになる。満を持して2017年にスタートする。

(2) 「学び」をキーワードに人や活動をつなぐ



<https://www.amanokuni.jp/ucma/>

・みんなが先生
好きなことや、誰かにはなしたいこと、そんな誰にでもあることが誰かの「好奇心に火をつける」。

・どこでも教室

公共施設のみならず、商店街やお店、公園、河川敷などの場も教室になりうる。それぞれの学びの場が連携してまち全体が大学の機能を果たす。

・みんなが生徒

いくつになっても好奇心をもって学ぶ楽しさはかけがえのないもの。



<https://www.amanokuni.jp/ucma/about/>

この3点をモットーに多様な人々が協働して日々、さまざまな場所で、遊び心を大切に「学校ごっこ」をおこなっている。

(3) 特色ある活動

・学生証と学特（ガクトク）

みんなの尼崎大学では、入学願書をだすと学生証がもらえる。人口の一割である45000枚を目標にかかげており、「まちの一体感を作る、ゆるやかなコミュニティ」をつくりだす装置として機能している。

学生証を提示することで、「尼大生」はさまざまな特典をうけることができる。特典は飲食店や医療サービスの割引など

1

もっと楽しく学べるまちに ～まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』～

多岐にわたっており、みんなの尼崎大学の学びが地域の多様な人々の積極的な応援のもと展開されていることがわかる。

- ・オープンキャンパス

尼崎市内でおこなわれる学びの場に参加する。場の紹介やコンテンツ体験、さらには、参加者全員でその学びの場をアップデートするためのアイデア会議をおこなう。

- ・みんなの尼崎大学相談室

月に一度おこなわれる学生相談室では、まちに関心がある人や得意を活かしたい人、尼崎で事業をおこないたい人などが、活動の場を見つけたり、広げたりしており、人と活動をつなぐ機能を果している。

講義の様子



Slidoを使った質疑応答・意見交換

レクチャーをおえ、質疑応答・意見交流がおこなわれた。終了時間まであとわずかでありながら、積極的な質疑応答が交わされた。

今回のプロジェクトの本質にかかわるものとして、学ぶ人がいかにして主体的に地域の課題にかかわるようになるか、その転換のための仕掛けはあるのか、という質問があった。その回答は、受け入れられる場をつくりだすこと、地道に人を誘って、広げていくことが大切であるということであった。

また、行政主導の学びの在り方から、プラットフォーム、みんなの尼崎大学への発想の転換のきっかけはなにか、という質問には、前提として行政職員だけではできないという気付きがあったとし、行政の役割を「みんながやりたいことを応援する立場」と認識していることを説明された。そこでおのづから、市民や民間事業者との協働が求められる。そのため、みんなの尼崎大学のロゴは自由に使用可能にしているとのことである。

個人の関心が学びにむすびつき、それが多様な人々とながらで広がっていく。その広がりの方角に地域課題の解決がある。そのような学びとまちづくりのかかわりを「みんなの尼崎大学」という仕組みをもって、試行錯誤を続ける尼崎の事例はこれから北広島町のスタイルを設計するうえで多くの示唆をあたえるものである。

(伊藤 昂・山川 肖美)

2

地域豊饒化と風、水、土、種の話 ～種づくりの作法と色々な種のご紹介～

日時：2020年1月23日 14:00～16:15

会場：北広島町千代田地域づくりセンター 2階研修室

タイトル：

「地域豊饒化と風、水、土、種の話～種づくりの作法と色々な種のご紹介～」

講師：永田 宏和 氏

(デザイン・クリエイティブセンター神戸副センター長)



参加者：45名（北広島町行政職員、同地域づくりセンター等職員、廿日市市市民センター職員、スタジオメンバー等）



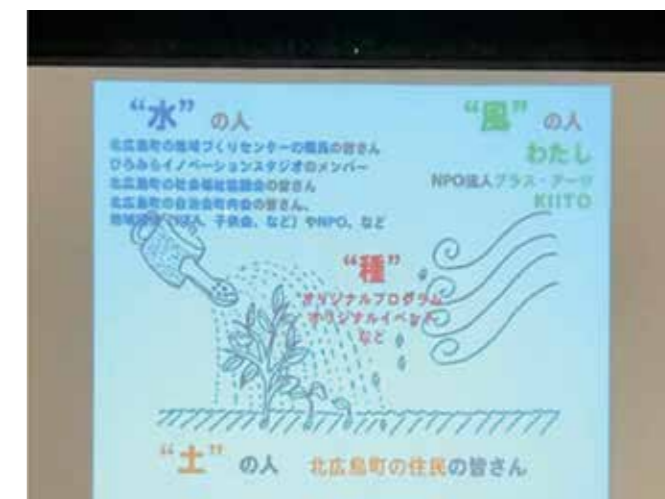
地域活性化でなく、地域豊饒化

人口減少社会を迎え、地域を「活性化」することは難しい。「活性化」ではなく、地域を豊かに「豊饒」することにシフトし、地域の人々が仲良く生き生き暮らし、元気なまちにして

いくよう「豊饒化」と表現している。

地域豊饒化と土・水・風の人、そして種の話

「地域豊饒化」のためには、その土地で根を張り活動し続ける・居続ける存在である「土」の役割の人、その土地に寄り添い種に水をやる中間支援的存在の「水」の役割の人、その土地に「種」を運ぶ、刺激を与える「風」の役割の人、そしてイベントや活動内容である「種」が必要である。人口減少、挨拶等のコミュニティが崩れつつある枯れた「土」を変えるのは難しい。そしてそこへ捲く「種」を創るのも難しい。乾いた土にも強い品種改良した「種」を「風の人」が外から運び、持ってきた種に水をやり育てていく「水の人」がいて、「土の人」に変化が現れる。



(講師のプレゼン資料より)

市民参画を応援するための大切な2つの視点

「不完全プランニング」と「+クリエイティブ」

まちづくり活動において、地域住民の積極的な参加や交流を促すプログラム（種）は不完全なカタチが良い。完全な丸ではなく、隙間があるからこそ様々な人が様々な形で近づい

てきて助け合うことにつながる。

そして、クリエイティブ＝今あるものをぶち壊すこと。つまり、既成概念を壊し、非常識ではなく超常識を目指すことが大切。これを、+（プラス）クリエイティブ＝魅力化すること、と呼んでいる。

この後、いくつかの魅力的な種の事例の紹介があった。



事例1「イザ!カエルキャラバン」



<http://kaeru-caravan.jp/whats>

従来の「防災訓練」では若いファミリーが集まらない、顔ぶれが同じ、動員による開催などの問題点が聞かれる。

こうした問題を、おもちゃの交換会「かえっこバザール」や楽しくアレンジした「防災体験プログラム」などの工夫により、

子ども連れの若いファミリー層の参加や進んで参加する人、企画から関わる人などが増えてきた。

ビニール袋からポンチョ作成し、出来上がったものにデザインし、アート作品にすることも大変好評である。

事例2「レッドベアサバイバルキャンプ」



<http://red-bear.org/?p=40>

これは、親子で学べる避難生活体験プログラムである。1泊2日で様々なサバイバルプログラムに参加し、サバイバルの技をマスターすると缶バッジをもらえるしくみにした。

イザ!カエルキャラバンもそうであるが、その種を使う地域や団体によりローカライズされていくところが非常に面白い。プログラムとして独占するのではなく、オープンにすることで、その土地に合った形で愛着をもって各地で継承されている。例えば、神戸バージョンもあるが、福島いわきバージョン等もある。

事例3「ちびっこうべ」「BE KOBE」ミライ PROJECT

未来を担う子どもたちへの豊かな学びとして、プロから、本物の知識や技を楽しく学び、知ること、自分たちの手で一から「まち」をつくる機会を提供している。子どもたちに創造性

を育むことを目的とした体験プログラムであり、子どもは神戸の仕事を知り、自ら仕事を生み出すことまでできるようになる。

事例4「パンじい」



<http://kiito.jp/people/panjii/>

家の中に引きこもりがちな男性高齢者に向けて、プロのパン職人がパンづくりを指南する。

そばや料理ではなく、「神戸＝パン」に焦点を当てている。子ども食堂でのパン焼き活動、「ちびっこうべ CAFE」で子どもたちとのコラボレーションの実現も図り、活躍の場が広がってきている。

KIITOの活動指針

- ①いい「種」を創るヒントを創る
- ②いい「種」を運ぶ「風の人」になる
- ③いい「種」のわかるセンスのある「水の人」(市職員等)を育てること。

参加者の受け止め (WSを通して)

WSは、予定よりも短い時間になったが、ペアワークからグループワーク、全体共有という形で本日のふり返りと明日からの業務改善に向けて得た知見の共有をした。

- ・既成概念や枠組みに囚われることなく、住民と行政が楽しみながら行えるプログラムを構築したい。
- ・幸福度をあげる一環としての社会とのつながり、参加に着目

し、今後のイベント等の背景を探り、さらなる市民参加には何が必要かを考えていきたい。

- ・KIITOの活動にぜひ参加し、実際に体験したい。
- ・「種」を蒔いた後は、その成長を土の人、水の人に任せてしまうという姿勢が深い。その姿勢だからこそ、住民に自らの手で作り上げた感が湧き上がり、今後に持続していくのだと改めて感じた。「持続可能」とは、自分だけで抱え込むのではなく、「いつでも誰でもどこでも」できるようなシステム作りだと考えさせられた。

終了後の参加者の感想 (一部抜粋)

参加者からは、「発想の転換がいかに大事であるかを実感した研修でした。」「これからの地域づくりセンターを「学びの場」から、さらに「学んだことを地域に貢献する場」というように、地域の皆さんが生き生きと活躍できる場にしていく必要性も再確認できました。」「私はこれまで何かを企画立案する際には、他人から指摘される事を恐れ「完全プランニング」の提供を志していた。完全であることに対して「案に隙がない」と言葉を頂いたことが実際にあり、それを褒め言葉と捉え嬉しく思う自分がいたが、永田氏から話を聞いて考え方を改めた。思い返してみれば、完全プランニングであることは、確かに地域住民の意見を聴く機会を殺しており、沈黙が流れたことが多々あった。これでは住民の参加意欲を上げることに繋がらないでしょう。「役場がやってくれるだろう」という住民スタンスを壊して、地域住民率先型に方向転換していかないと。次は機会があれば不完全プランニングを提供し、老若男女問わず一人でも多くの住民が意見を出し合える環境を整えればと思ってみる。」など、既存意識の変革がなされたことを示唆する感想が多くきかれた。

(山田 由美・山川 肖美)